

南校区まちづくり協議会で 「新しい運動会をつくる！」

宮崎県小林市 南校区まちづくり協議会

はじめに

小林市は宮崎県南西部に位置する農畜産業を主要産業とした人口約4・3万人のまちである。

その市街地にある小林市立南小学校区で、協働により自主的に住民が参加したくなる・参加しやすい地域づくり活動を推進し、いつまでも住民が手を取り合い助け合うことを目指し、2017年10月に南校区まちづくり協議会が設立された。

自治会（区・組）に加え、市民活動団体、小学校、企業等様々な団体が参画し、小学校区内でのネットワークを構築し、各団体の担い手不足等の課題を団体間で補いながら、地域振興や課題解決に取り組んでいる。「世

代を超えて手を取り合うことが大きなチカラとなって地域を元気にしていく」という想いを胸に日々活動している。

なぜ運動会を行ったのか

スポーツ共創との出会いは、2018年10月20日（土）に宮崎県小林市で開催された宮崎こばやし熱中小学校（以下「熱中小」）の授業で、一般社団法人運動会協合理事犬飼博士先生による「IT社会とスポーツの変化 こばやし熱中運動会やってみませんか？」の授業である。

「新しい運動会の種目を作る」という題目のワークショップで、生徒60名が講義の後に運動会の種目を考えた。



【写真1】2019年3月17日（日）九州大学で行われた「第1回 未来の福岡の運動会」



2019年1月南校区まちづくり協議会（以下「まち協」）と小林市社会福祉協議会の共催ワークショップにおいて、参加者から住民参加型の「新しい運動会を開催したい」との意見があがり、同年3月九州大学で開催された「第1回 未来の福岡の運動会」に参加した。当日は100名を超える参加者があり、家族、学生、ハンディキャッパー、エンジニア等多様な仲間との競技&協議・競争&共創を行った。【写真1】

同年5月「まち協」総会で自治会（区・組）などの地域コミュニティは、加入率の低下や役員等の活動の担い手の固定化などにより共同体としての機能が低下しつつあり、地域住民も価値観や課題等を共有していくことが困難になりつつあるという現状について意見が出た。そこで、「まち協」などの新しい地域コミュニティ活動を通じて、市民が自治意識を高め、互助の必要性を再認識し、連帯意識や相互の絆を再生していくための一つのきっかけ作りとして「みんなで作る新しい運動会」の開催を提案した。

スポーツ共創人材ワークショップ合宿 2019でこれまでにない 運動会を学ぶ

同年9月、東京にてスポーツ庁の事業

「2019年度スポーツ人口拡大に向けた官民連携プロジェクト・新たなアプローチ展開」の一環として開催された、スポーツ共創人材育成ワークショップ合宿2019に参加した。

初日はアクションプラン（ゴール）を設定し、考え方と対話の哲学を学び、2日目は、運動会のハッカソン（アイデア出し）を体育館で行い、デイベロップレイ（スポーツ共創）を行った。

第1競技「ターザンボーリング」第2競技「ずばらサッカー」第3競技「タピオカバランステイヤー」第4競技「3D綱引き」の4種類のスポーツを共創した。

午後からは自分たちで台本、マニュアルを作成し、役割分担を行い、安全の確保を行うつつ四つの競技を行った。

3日目は初日に作成したアクションプランに従い「第1回こばやし熱中運動会」をプレゼンし参加者と講師陣からアドバイスを頂いた。

知らない人だらけの参加者が、運動会の競技発案から創り、実際に運動会を開催してみんな楽しんで。競技の楽しさだけでなく、自分たちで競技を創ることで、勝ち負けだけではない充実感が得られ、また、創造力・コミュニケーション・運動・交流・連携・協力・発信力といった様々な要素が含まれており、

社会や教育、地域活性化、地方創生など多くの場面で活用できると実感した。

第1回こばやし熱中運動会開催

「第1回こばやし熱中運動会」の開催にあたり、運動会のハッカソンを行った。犬飼博士先生と株式会社運動会屋代表米司隆明先生を招き、「運動会とは？」という授業で役割等について学んだ。

「プロデューサー（主催者）」 〓 運動会と宮崎県小林市をつなぐ役割。

「ディレクター（運営者）」 〓 運動会を開催する目的を世代間の交流の場と位置付け目的達成の手法を提案する役割。

「ファシリテーター（司会者）」 〓 運動会の競技をハッカソン参加者とともに考え、安全や参加者の構成等を考慮し、目的の達成のために環境を整える役割。

「デイベロップレヤー（製作者）」 〓 develop（つくる）+ Play（あそぶ）運動会に参加し競技を作る事と遊ぶ事が一体となっている人。

その他運動会のゴールや完成の定義、運動会と社会の関わり合いを学び運動会の競技を参加者で実際に作った。

運動会を開催するにあたり、事前にテレビ会議を講師と3か月ほど前から行った。当日

はスポーツ共創人材育成ワークショップに参加したメンバーがプロデューサー・ディレクター・ファシリテーター・メインMCを務め、参加者は、ディベロップレーヤのみの役割を担った。

運動会のアクションプランは、

なにを？Ⅱ「第1回こばやし熱中運動会」

いつ？どこで？Ⅱ「2019年10月19日
ハッカソン、20日運動会を宮崎県小林市コスモホールで開催」

だれと？Ⅱ「南校区まちづくり協議会の区民と宮崎こばやし熱中小学校の生徒」

そのゴール（成果）はなんですか？Ⅱ「世代間の交流とまちづくりを共感する機運の醸成」

なぜあなたが？Ⅱ「「まち協」会長であり、まちづくりへの無関心を変えたい思い」

課題になることはなんですか？Ⅱ「完成した競技をハッカソンに参加していない運動会参加者にどう伝えるのかと次回開催に向けての継続性」

ハッカソンでは運動会定番の用具からデジタル機器まで準備し、参加者全員でアイデアを出し合い、ファシリテーター4人が各チームに分かれディベロップレーヤを行い、「競技中のルールが分かりやすいか？」「安全に配慮し

ているか？」などの意見を出し合い競技内容を決定した。

第1回こばやし熱中運動会当日、午前中からスタッフとファシリテーターが運動会の予行練習を行い、開会式の流れ・競技の進行具合・審判・点数・時間配分・アトラクション等を確認した。競技のルールを参加者に伝えるために競技前にスタッフでデモンストレーションを行うことを決めた。

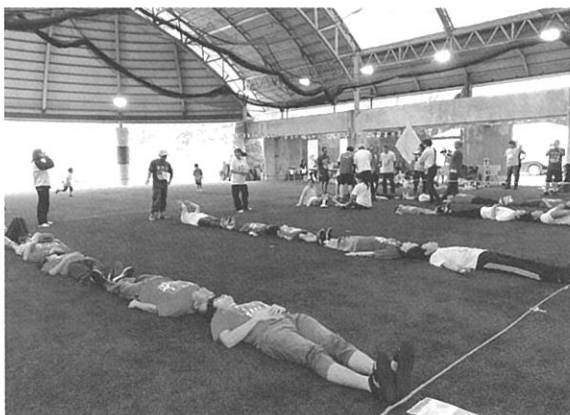
午後からの運動会では、運動会の空間を一つの小さな「小林市」と考え、運動会の見学者はまちづくりのプレーヤーとし、2歳から最高齢92歳までの運動会を行った。

第1競技はYCAM（山口情報芸術センター）で開発されたYCAMボールを使った「ゆらして送れ！YCAMボール」。

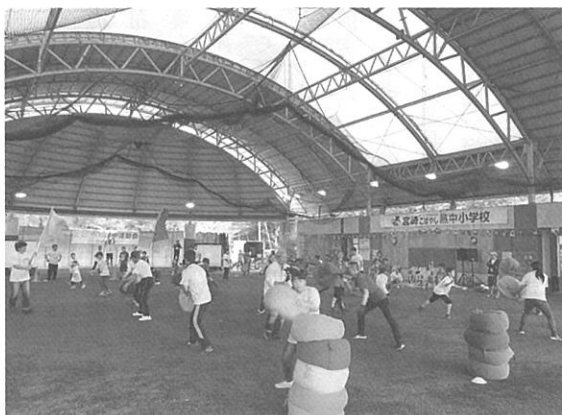
揺れた回数をカウントするボールを振りながら、チームメイトにパスして、制限時間内のカウントを競う競技。

第2競技はファシリテーター藤原和将さん（a-project 株式会社）が開発した不整地トレーニング用ビーズクッションを使った「ビーズツムツム」。

ビーズクッションをチームで運んで積み上げ、積み上げたビーズクッションタワーの周りを3周してまたチームで運んで積み上げ



【写真3】「人材発掘」



【写真2】「ビーズツムツム」



【写真4】「第1回こばやし熱中運動会集合写真」2019年10月20日（日）

る、スピードと正確性を競う競技。【写真2】
 第3競技は小林市の左近（さこん）太郎（たろう）を使った「おじやみとっちやろかい」。左近太郎とは谷川の流れを利用して作った米つきの装置であり、装置を模した木製の器具でおじやみ（お手玉）を高く上げ、バケツで拾う競技。
 第4競技は究極の人間借り物競走「小林市人材発掘ゲーム」。

お題に沿った人を参加者の中から連れてくる競技。当日は身長を合計を7メートル・年齢合計を300歳で競い、2歳から92歳までの参加者で競った。【写真3】

最終競技は「合体バブルボールだるま」。バブルボールと大玉ころがしの大玉を使った競技で、子どもチームはバブルボールを転がして、宮崎県産完熟マンゴの箱をバブルボールの中心に詰めて戻ってきてから大人チームとバトンタッチ、大人チームは大玉を地面に落とさずに運び、最後にだるまのようにバブルボールの上のせてタイムを競う競技を行った。

第1回こばやし熱中運動会における課題と第2回への展望

競技名だけでは中身が分からないのがこの運動会の面白さであり、参加者だけではなく見学者も含めて「みんなでつくる運動会」である。2歳から92歳までの60人の参加者があり、当初の目標である「世代間の交流とまちづくりを共感する機運の醸成」に沿った運動会を開催することができた。

第1回こばやし熱中運動会において「運動会をつくる」ということが住民に伝わりやすく、参加者の募集に苦労した。しかし、参加者からは一同に「こんなに楽しい運動会は

じめて」「また参加したい」と満足そうな意見をもらった。当日はテレビ宮崎の夕方ニュースで放映され、後日宮崎日日新聞と小林市の広報紙に掲載され、取り組みを広く伝えることができた。【写真4】

第2回こばやし熱中運動会の開催

2020年5月、第2回こばやし熱中運動会の開催が決定し、前回の動画をSNS等で発信して参加者を増やす取り組みを行った。

2020年11月1日、「第2回こばやし熱中運動会」をまち協と熱中運動会部が中心となり小林市健康都市推進室の後援のもと前回の運動会の経験を活かして開催した。

参加者募集は南小学校区住民と南小学校生徒及び市内のまちづくり協議会へチラシを配布し、その他の地域向けにはFacebookで募集を行った。参加対象者は年齢・性別・ハンディキャップは問わず広く募集、当日は2歳から79歳までの60名が参加した。新型コロナウイルス感染症拡大防止の配慮から、会場を前より広い生駒地区のコスモホールとし、検温・消毒・3密を避けて開催した。

当日は運動会の趣旨説明を行った後、参加者の役割分担や運動会の種目、使用道具やルール等をファシリテーターが中心となり、5競技を参加者自身が考えた。使用する道具



【写真6】「バブルクッション早抜き転がし」



【写真5】「つないでドン」

とテーマはくじ引きで決め、四つの団が競技をそれぞれ考えた。自己紹介からはじめたが、次第に参加者のアイデアが集まりだし、競技を作っていく過程で各団の団結は強くなっていった。

運動会は、選手入場から始まり、宮原小林市長による来賓あいさつ・西諸弁ラジオ体操・選手宣誓を行った後、熱中運動会恒例の「雄叫び」で自分たちの団の士気を高め他団の健闘を祈った。

第1競技はビーズクッションを使った「つないでドン」。

ビーズクッションを投げて島を作っている、ゴールのハロウィンバルーンを倒したら成功。成功したらビーズクッションを回収しながらスタート地点まで戻り、3分以内に2回倒せるか。これを、どこまで進めるかを競う競技。【写真5】

第2競技はバブルボールを使った「バブルクッション早抜き転がし」。

空気を抜くと転がしにくいバブルボール。30秒間で相手のバブルボールの空気を抜いてから大玉ころがしの要領で競う。戦略とチームワークが試されるタイムトライアル競技。

【写真6】

第3競技は相撲の土俵を使った「おじやみ人間掃除機」。



【写真7】「人間掃除機」

腕を組んで土俵に散らばったおじやみ(宮崎弁で「お手玉」)を拾ってバケツに何個人入れられるかを競うもので、息の合ったチームプレーが試される競技。【写真7】

第4競技は綱を使った「よんごひんごツナツナアミアミ」。

十字綱引きの綱を三つ編みにしていき、できた三つ編みの数を競うもので、連携と女子力が試される競技。よんごひんごとは宮崎弁で曲がりくねったという意味。【写真8】



【写真9】「マーカードロップ」2020年11月7日（土）



【写真8】「よんごひんごツツツナミアミ」

競技名だけでは中身が分からないのがこの運動会の面白さであり、参加者だけではなく見学者も含めて「みんなで創る運動会」である。2歳から79歳までの参加者が「運動会」の空間を小さな「小林市」と考え、みんなを巻き込んだ運動会が完成した。

後日開催された第5競技、熱気球を使った「マーカードロップ」は、少雨のためマーカードロップを投げることができなかったことから、安全を考慮し、熱気球体験に変更した。【写真9】

運動会開催後のアンケートでは「今年小学校の運動会も縮小で寂しかったが、このような運動会に参加できいろいろな年代の人とも友だちになれて楽しかった（小学4年）」「多くの若者がまちづくりや地域コミュニティに真剣に取り組んでいることに驚いた（区長70代）」等のご意見を頂いた。後日宮崎日日新聞と小林市の広報紙に掲載され、まち協新聞でも紹介し、活動を広めた。昨年の第1回こばやし熱中運動会がスポーツ庁のコラム「スポーツ」に掲載された影響で、今回、東京・大阪・福岡・鹿児島からの参加者があった。

新しい形での運動会を開催することにより、新たな地域コミュニティの再構築や世代間交流。そして、住民の運動機会の創出や健康増進を図る効果を確認することができた。

【写真10】

最後に、この運動会を開催するにあたり



【写真10】「第2回こばやし熱中運動会集合写真」2020年11月1日（日）

一般社団法人運動会協会犬飼博士先生・株式会社運動会屋代表米司隆明先生をはじめ、スポーツ共創人材育成ワークシヨップ合同2019に携わっていただいた多くの方々、そして共催事業を引き受けていただいた一般社団法人熱中こばやしの皆さまに感謝申し上げます。

（南校区まちづくり協議会会長 吉村秀昭）

